

令和元年度

京都府立綾部高等学校由良川キャンパス(東分校)

定時制課程

学校経営計画

(スクールマネジメントプラン)

実施段階

令和元年度 京都府立綾部高等学校(東分校定時制) 学校経営計画(スクールマネジメントプラン) (実施段階)

学校経営方針(中期経営目標)	前年度の成果と課題	本年度学校経営の重点(短期経営目標)
学力の向上と進路希望の実現 基本的生活習慣の確立 基本的人権を尊重する態度と豊かな人間性の育成 健康及び体力の維持向上 地域社会から信頼される学校づくりの推進	(成果) 休学・転退学等の進路変更が1名、原級留置者が2名であった。生徒一人一人に寄り添ったきめ細かい指導の結果、原級留置・中退者数については、最低限に抑制することができた。 体育的行事や運動部活動には生徒の多くが意欲的に参加している。特に部活動(卓球部)においては、3名の生徒が全国大会に進出する等、顕著な成績をおさめることができた。 コミュニケーション力に課題があり中学校で学校に適応できなかった生徒についても、暖かい雰囲気の中、多くが落ち着いて学校生活を送ることができている。 (課題) 生徒の学習意欲は依然高いとはいいがたい。生徒の興味関心をさらに喚起するべく授業内容・授業形態・評価方法等を工夫する必要がある。 将来に対して前向きな展望を持ち自分自身の進路希望を明確化することが困難な生徒が多い。生徒一人ひとりに対して、継続的できめの細かいキャリア教育を実施する必要がある。 集団生活において時として社会的な未熟さが顕在化する生徒が依然として少なくない。今後とも自己肯定感や社会性を身につけさせる必要があり、そうした観点から特別活動等の積極的な運用を検討する必要がある。	生徒一人一人の個性や背景に寄り添った指導体制の確立 4S運動の推進 〈整理〉〈整頓〉〈清潔〉〈習慣〉 業務のスリム化

分掌・教科	項目(重点目標)	具体的方策及び数値目標	評価		成果と課題
1 組織運営	・生徒の実態に応じた教育を、効果的に実践できる体制を構築する。	授業内容、授業形態等の工夫を促進するため、授業見学及び授業評価を複数回実施する。	B	B B	・授業見学は随時、授業評価は複数回実施したが、教職員の資質・能力の向上につながる新しい取組を実施することができなかった。 ・サーバー上のデータの整理を行ったが、趣旨をてってできなかった部分があった。
		本校の教育課題に応じて、教職員の資質・能力の向上につながる取組を複数回企画・実施する。	C		
		校務の効率化を図るため、情報の電子化と共有を進める。	B		
2 教務部	・授業改善に努め学力の向上を図る	校務システムを効果的に運用し、教務関係文書を正確に遅滞なく作成する。	B	B B B	・校務システムと連絡会を活用して、毎日の生徒の状態を把握することができた。 ・過年度追認が必要な生徒に対して、長期休暇の間に補習を行い、全員が進級、卒業することができる見通しである。
		教科担当・学級担任に教務関連情報を確実に伝達し、誤解や意思の不統一が生じないようにする。	B		
		補習などを効果的に行い、生徒個々の学力を向上させることにより、全員を卒業進級させる。	B		
3 生徒指導部	・安心安全な学校づくりを行う。 ・個々の発達段階に応じた指導を行う。	問題事象に俊敏に対応し、各部・関連機関と連携し丁寧な指導を行う。	B	B B B	・安心安全な学校作りを目指し、各教員・各分掌と連携し情報共有・対処が行えた。 ・生活・学習上で不安定な要素を抱える生徒もいるので、今後も注意して見守っていきたい。
		問題事象の芽を摘み予防活動をいっそう推進し問題事象0を目指す。	B		
		各関係機関と連携して交通安全教室、非行防止学習、法律講座などを適切に実施する。	B		
4 進路指導部	・自身の将来と向き合う取組を実施し、進路実現に向けてきめ細やかな指導を行う。	各学期に進路希望調査を行い、個々に対応した指導を展開する。	C	B B B	・学期毎の進路希望調査については実施することができなかった。 ・進路学習については、外部講師による講義や学校見学等を通じて、生徒の関心を高めたり、卒業後必要なスキル等の情報を提供することができた。
		学年による進路学習を実施し、希望進路を段階に応じて明確にさせる。	B		
		外部機関と連携をとり、卒業後に必要となるスキル等の情報を生徒に提供する。	B		
5 保健部	・心身ともに健康的な学校生活を送らせる。 ・自身の健康について興味を持たせる。	生徒の健康診断の受診率を90%以上にする。	B	B B B	・80%以上の生徒が健康診断を受診することができた。 ・命のがん教育についての保健学習では、講演だけではあったが生徒の感想文等から成果があった。 ・月1回保健だよりを発行し、さまざまな内容を生徒や保護者に伝えることができた。
		命のがん教育についての保健学習の取組を通じて、たくさんの次世代を担う生徒達が、健康的な生活習慣を身につけるとともに、命の大切さや生きることの素晴らしさに気づき、他者の命を尊重するところを育んでいけるように努力する。	B		
		「保健だより」を月1回発行する。	B		

分掌・教科	項目(重点目標)	具体的方策	評価	成果と課題
6 人権 教育部	・差別意識の解消に向けた学習を行い、生徒に人権意識を根付かせる。 ・奨学金制度の周知徹底を行い、進学や就職に際しての金銭的な不安の解消に役立つ。	人権意識を養うため、講演等の人権学習を年2回実施する。	B	B B B ・出前授業を活用した人権学習を2回実施し、生徒の人権意識の向上に役割を果たした。 ・生徒の現状を踏まえた人権学習を計画するために、感想文や事後アンケートの活用が今以上に必要である。 ・各学年部と連携して奨学金制度の周知徹底を図った結果、制度の利用を希望する生徒が昨年度に比べ増加した。
		人権学習において、教員にもアンケート調査を行い、人権学習の充実に役立つ。	B	
		各学年部と連携し、奨学金制度の周知徹底を行い、希望者には応募の際の添削指導や面接指導を行う。	B	
7 第1 学年部	・健全な生活習慣を確立させる。 ・生徒一人ひとりの様子を把握し、きめの細かい学習指導を行う。 ・家庭や学校での豊かな交流により社会性を身につけ、人間性を育成する。	毎日の健康状態を確認し合い、お互いに安全で安心した学校生活を送らせる。	B	B B ・登校時から教室や給食室で楽しく交流する雰囲気があり、日常会話から健康状態や興味・関心について認め合うことができた。 ・日直や美化活動などクラス内での役割を明確にし、「一人二役」の活動に対して取り組むことができた。 ・進路目標を明確にさせながら、学習した内容をきちんと日常生活や家庭学習に結びつけられるよう、これまで以上に各教科での予習や宿題に取り組ませたい。
		生徒の興味・関心を学習意欲に結びつけ、自分に合った取り組み内容や家庭での学習時間、将来の進路実現に向けた各自の学習状況を月1回調査する。	B	
		自分自身や相手の良さを見つけ、周囲との関わり方や社会性を身に付けさせるためクラス委員や、昨年度に引き続き「私の一人二役活動」において成功体験を獲得させる。	B	
8 第2 学年部	・生徒それぞれの状況を把握し、生活・学習面において自らを律して行動ができるように指導を行う。	挨拶を始めとする毎日の対話を通して、生徒の状況を把握する。	B	B B B ・担任が年度途中で変更したが、過度に動揺を与えることなく、円滑に引き継ぐことができた。 ・各教科・分掌担当間で生徒の最新の状況について情報共有したり、授業中の見回り・見守りにより、クラスの様子を把握することで、適時の指導に生かすことができた。
		教科担当等の教員と連携を密にとり、必要に応じて生活・学習支援を行う。	B	
		面談を通して、自立に向けた生活習慣・進路指導を適宜実施する。	B	
9 第3 学年部	・生徒の学習状況、生活状況を把握し適切な指導を行う。 ・各々の生徒が将来に向けて展望が持てるようにきめ細やかな進路指導を行う。	生徒の現状把握のため、日常の挨拶を毎日行うなど積極的な交流を行う。	B	B B B ・登校時などの声かけを通じて生徒との交流を行い、彼らの現状をある程度知ることができた。 ・毎月、面談を行うことができた。今後は面談のテーマを定めるなどして、面談がより充実するよう取り組んでいく。 ・進路指導を重ね、生徒が自分と向き合う時間を確保することができた。
		月に1回、生徒との面談を行う。	B	
		日常生活の振り返りを通じ、自己との対話を行わせ、主体的なキャリア形成を行えるよう指導する。	B	
10 第4 学年部	・生徒全員の卒業および希望進路の実現を目指す。 ・生徒一人ひとりの学習状況や生活状況を把握し、きめ細かな指導を行う。	進路指導のための個人面談を月に1回以上実施する。	B	B B B ・希望進路の実現に向けて、個人面談や個別の進路指導を丁寧に行い、2学期中に多くの生徒が進路を決定することができた。 ・欠席が多い生徒については、家庭と密に連絡を取ることができ、欠席時数超過による単位不認定が出なかった。 ・連絡会や職員会議等で生徒の情報を共有することができ、指導に活用することができた。
		無断欠席があった場合には欠席ごとに家庭連絡を入れる。	B	
		生徒の様子を把握するため、登校時の立哨を毎日行い、得られた情報を教員間で共有する。	B	
11 国語科	・社会生活において必要な国語について、その特質を理解させ適切に使用できるよう指導する。 ・言語活動を行い、銘々の伝え合う力を高め思考力や想像力を育成する。	漢字や語句の小テストを週に一回行う。	B	B B B ・漢字の小テストについては実施することができた。語句に関しては定期考査で実施することができた。 ・毎回の授業で、生徒自身が学んだこと・感じたこと・疑問に思ったことを言語化する時間を確保することができた。 ・使用する教材に合わせて、写真やイラスト、映像などの視聴覚教材を使用することができた。
		簡単な文章の作成やスピーチなど、言語活動を毎回の授業で取り入れる。	B	
		学習の補助となるように、視聴覚教材を授業で使用する。	B	
12 地歴 公民科	・地歴・公民の基本的な事項を理解し、知識として定着させる。 ・社会に出た時に必要な知識や能力、特に自分の意見や考えを持ち、それを相手にわかりやすく伝える能力を身に付けさせる。	知識の定着を図るために、ICT機器を中心とする視聴覚教材を毎時間取り入れる。(地歴)	B	B B B ・特に地理では、ほぼ毎回ICT機器を使った授業を展開することができた。 ・定期的に自分の意見や考えを発言する場を設けることができたが、生徒間で意見を交わしたり、考えを共有することは十分にできなかった。
		学習した内容を踏まえて原因や背景を考察する機会を1単元につき1回以上つくる。(地歴)	B	
		月に1～2回程度ニュースや新聞記事など身近な事例を取り上げ、社会問題について意見を交わす場を設ける。(公民)	B	
13 数学科	・数学の原理・法則に興味・関心をもたせながら、基礎知識を身につけて計算能力を向上させる。	日常に潜む数学を題材とし、生徒の意欲・関心を高める授業を行う。	B	B B B ・教材の内容を日常生活と結びつけることにより、生徒の興味や関心を喚起することができた。 ・演習の時間を十分に確保し、進度の遅い生徒には個別に指導することで、きめの細かい指導を行うことができた。
		授業のねらいと目標を明確に提示し、生徒ができるようになったことを実感できるようにする。	B	
		演習時間を十分に確保し、グループでの学び合いも取り入れて言語活動を充実させる。	B	
14 理科	・身近な事柄から理科に対する興味を持たせ、社会生活に必要な科学的知識・能力を身につける。	演示実験や持ち込み教材・ICTを、2時間に1回程度の割合で持ち込み興味を持たせる。	B	B B B ・理科に対する「難しい」というイメージを少しでも払拭するように努めたが、十分な成果をあげることはできなかった。 ・各学年で教科の内容を日常の現象に関連付けて説明することができた。 ・プリント、持ち込み教材の利用、ICT教材の利用にまだまだ工夫が必要であり、今後の課題としたい。
		自然や日常的な事柄と学習内容を関連させ、知識の定着と利用方法を伝える。	B	
		理科において必要な計算・知識について、プリント・講義・ICT映像で繰り返し指導し定着を図る。	B	

分掌・教科	項目(重点目標)	具体的方策	評価	成果と課題
15 保健体育科	・保健、体育の授業を通して、生徒が心身ともに健康的に日々の生活を過ごすことができるための授業を展開する。また、生涯スポーツの観点から、多くの項目を通して卒業後もスポーツに積極的に触れ合う姿勢を育成する。	授業始めにランニング2周と体操、ストレッチ(柔軟体操含む)を行う。	B	B B B ・全学年において授業始め毎時間2週のランニングを行うことができた。 ・全ての種目でプリントを作成し、筆記試験を行うことで競技のルール等を覚えさせることができた。 ・全学年において数多くの多様な種目に触れさせることができた。
		それぞれのスポーツへの知識や理解、興味を育成するため、全ての種目でプリントの資料を作成する。	B	
		多くのスポーツに触れ合う機会を持たせるため、1年間で7種目以上の生涯スポーツを行う。	B	
16 英語科	・日常生活の中に英語があふれていることに気づかせて、身近に使われていることを実感させ、自分で学ぶことができる力を育成する。	生徒に関心を持たせ、理解を深めるために、ICT教材を使って授業を行う。	B	B B B ・ICT教材や音楽教材を使って授業を行うことができた。 ・フレーズや文法を使って、自分のことについて、短い文を作成させることで、主体的に取り組む態度を育成した。 ・プリントをまとめたり、単語テストによって、理解を深めることができた。
		生徒に授業内容を整理させ、理解を深めさせるため、毎時間ノートを回収し点検する。	B	
		生徒に知識を定着させるため、全学年、毎時間、授業中に単語テストを実施する。	B	
17 商業科	・高校で初めて学ぶ商業科目の面白さと社会生活に役立つことを実感させる。	簿記の仕組みを理解し、社会で役立つ知識を基礎からの積み重ねで理解させる。	B	B B B ・当初、簿記の学習に不安を感じていた生徒も、理解が進むにつれて興味を持ち、積極的に取り組むようになった。 ・簿記検定を受験させられなかったのが残念である。
		反復練習により理解を深めるため、プリントを活用する。	B	
		授業を大切にさせるため、ノート提出や課題作成等、授業中の取り組みを重視して評価する。	B	
18 芸術科	・基礎技術を充実させ、自ら表現する意欲を育てる。	授業規律を大切に作る。	C	B B B ・創作に対する姿勢に個人差があり、意欲がない生徒に対する指導については十分な成果が上がらなかった。 ・集中して取り組んだ生徒の作品の中には、完成度の高いものが見られた。
		授業時間を有効に活用し、完成度を高める姿勢を身につけさせる。	B	
		基礎から高度な内容まで表現できる幅を広げさせるため、技術差のある生徒が取り組める課題を取り入れる。	B	
19 家庭科	・自立する力を育成する。	身近な事柄を教材として選び、生徒の興味・関心を引き出すよう工夫する。	B	B B ・身近な問題を取り上げることで、生徒の意識を高めることができた。 ・実習など体験的な学習に積極的に取り組ませることができた。
		体験的な学習課題を多く設定する。	B	
20 情報科	・現代社会における必須アイテムであるパーソナルコンピュータの操作に習熟させる。	タッチメソッドを習得させるため、タイプレスソフトによる反復練習を行う。	B	B B ・情報モラル・セキュリティ教育を体系的に行うことができた。 ・生徒が安全かつ有効に情報機器を活用できるよう、今後も繰り返し指導していく必要がある。
		文書入力量を重視して評価し、欠席しないで取り組む生徒を評価する。	B	

学校関係者 評価委員会 による評価	<ul style="list-style-type: none"> ・ここ数年、よい方向に向かって見える。多様な生徒が在籍する中、一人一人に寄り添ったきめ細かい指導が成果を上げていると思われる。 ・生徒の内面の成長が感じられる。生徒自身の努力と教員の温かい指導の賜と考える。 ・家庭との連携をいっそう密にして信頼関係を築いてほしい。 ・授業の中での発表機会の充実等、コミュニケーション能力を身につけさせるための取組を充実させることが課題である。
-------------------------	---

次年度に 向けた改善 の方向性	<p>(成果)</p> <p>昨年度から引き続きの休学者が1名あったが、それ以外の原級留置者は0名であった。生徒一人一人に寄り添ったきめ細かい指導の結果、原級留置・中退者数の抑制については成果が認められた。例年、将来に対する展望を持つことができず、進路希望が明確にできない生徒が多かったが、本年度は多くの生徒が比較的早い時期で希望進路を実現することができた。コミュニケーション力に課題があり中学校で学校に適應できなかった生徒についても、暖かい雰囲気のおかげで、多くが落ち着いて学校生活を送ることができている。</p> <p>(課題)</p> <p>生徒の学習意欲は依然高いとはいえない。生徒の興味関心をさらに喚起するべく授業内容・授業形態・評価方法等を工夫する必要がある。集団生活において時として社会的な未熟さが顕在化する生徒が依然として少なくない。今後とも自己肯定感の醸成やコミュニケーション能力の育成のために、新たな取り組みを創設したり、特別活動等の効果的な運用を図る必要がある。</p>
-----------------------	--